

令和 2 年 6 月 17 日現在

機関番号：16101

研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）

研究期間：2016～2019

課題番号：16H05714

研究課題名（和文）トランスナショナリズムからディアスポラへ？ペルーから日本へのデカセギの帰結

研究課題名（英文）Between transnationalism and diaspora: Consequences of Peruvian migration to Japan

研究代表者

樋口 直人（HIGUCHI, Naoto）

徳島大学・大学院社会産業理工学研究部（社会総合科学域）・准教授

研究者番号：00314831

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,800,000円

研究成果の概要（和文）：合計650名のペルー移民に聞き取り調査を行った。最終年度まで聞き取りを続けていたため、データの解析は今後の課題となるが、データを部分的に用いた成果も出しており、以下のような知見が得られた。(1)トランスナショナリズムとディアスポラへの分岐を規定する要因として、日本とペルーの各時点での経済格差がある。較差が大きかった時期（2000年代前半まで）にペルーに投資ができた場合、日本で状況が悪くなくてもペルーで暮らし、日本にいる家族との関係を保つことも可能である。こうした投資ができない場合、どちらにも足場がないディアスポラになる。(2)二世については、学歴と言語という2つの資本獲得によって分岐する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義としては、まず過去に日本で行われた移民の聞き取りでは最大の件数であることが挙げられる。諸外国で、プロジェクトの規模が拡大する中で、日本の研究で聞き取り人数が三桁に達することすら少ない。そうした状況において、650人の聞き取りにより質量ともに他を圧倒するだけのデータを得られたことの意味は大きい。また、萌芽的な知見ではあるが、トランスナショナリズムとディアスポラという曖昧に使われてきた概念に対して、経済的基盤から両者が分岐する条件を操作的に明らかにしつつある点は、今後の移民研究の発展に大きく資するものと考えられる。

研究成果の概要（英文）： We have had interviews with 650 Peruvian migrants. Although quantitative analysis is yet to be done, tentative findings from our fieldwork are the followings. (1) the economic gap between Japan and Peru greatly influences on bifurcation toward transnationalism and diaspora. Those who could invest in Peru, when the value of yen was greater, tend to enjoy transnationalism, constructing their living basis in both countries and vice versa. (2) Regarding bifurcation among the second generation, the timing of migration matters much less than the first generation. Instead, accumulation of human capital (i.e. education and language skills) is much more important.

研究分野：社会学

キーワード：移民 在日外国人 日系人 外国人労働者 デカセギ ペルー人 進学 移民二世

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1992年に提起されたトランスナショナリズムという概念は、数十に及ぶ雑誌特集と大量の書籍の刊行を経て、リーディングスが刊行されるまで定着した。この概念は、運輸通信手段が発展した現代移民の姿を巧みにとらえている。つまり、移民は送出国/受入国をまたいだ生活を送るようになり、国民国家を相対化する主体となりつつある。このような解放的イメージゆえに、トランスナショナリズムは移民研究のキーワードとなったと考えられる。

この概念は、在日外国人のなかでは南米系移民に対して適用されることが多かった。家族移民が可能で、二国間の頻繁な行き来がある点で、トランスナショナリズムの雛型にもっとも類似しているからだろう。しかし現実の南米系移民は、グローバルな格差拡大への能動的な対応というトランスナショナリズムの前提に当てはまりにくい。日本側では、派遣労働から抜け出せず長期不況により収入も停滞している。南米側では、所得が上昇した結果として、日本からの送金の価値が大幅に目減りした。さらに、リーマンショックと東日本大震災により、在日ブラジル人とペルー人は不本意ながら帰国し、人口はそれぞれ4割、2割減少した。

ペルーと日本の賃金差は、90年の100倍から2015年の4倍程度まで縮小した。日本で職業技能が身に着くわけでもないため、南米に戻っても低賃金の仕事にしかつげず、貯蓄を元手にビジネスを始めるのも難しい。それゆえ、不本意ながら家族の一部が日本に再び戻る例も多い。結果として南米系移民のうち、トランスナショナリズムが前提とするどちらにも足場があるというよりは、どこにも足場を持たない状態にある者の増加を帰結した。これが、1996年から20年にわたって南米から移民を調査した結果得られた知見である。

ここから、以下のような見通しが得られる。(1)南米系移民の経験はトランスナショナリズム論の想定から逸脱しており、むしろディアスポラに近いものとみなすべきではないか。(2)トランスナショナリズム論の前提は、現代移民の多くが必然的に経験する現実にもとづくというよりは、移民の社会移動が相対的に容易な米国の経験を過度に一般化しているのではないか。(3)グローバル時代の国際移民がもたらす帰結は、トランスナショナリズムの想定より多義的であり、理論の組み直しが必要なのではないか。

本研究のねらいは、単線的で記述的で楽観的なトランスナショナリズム論を批判し、集団間・集団内の分岐を分析できる理論枠組みを構築することにある。それにもとづき、ペルーと日本の間の人々の移動がもたらす帰結の解明・理論の彫琢を進めることが最終的な目標となる。

2. 研究の目的

本研究では、まず以下のような新しいトランスナショナリズム論を構築する。代表者からみて、トランスナショナリズム論には3つの欠点があった。(1)グローバル資本や国民国家への抵抗を強調するあまり、トランスナショナリズムのプラス面を過度に強調してきた。(2)アメリカの文脈を前提としているため、二国間関係や社会構造の多様性を理論に組み入れていない。(3)「いかにトランスナショナルな関係が生まれているか」に問いが収斂し、政治・経済・文化、一世・二世、ヒト・モノ・カネ・情報の越境を測定するだけの単純な概念となってしまった。

こうした欠点を修正しない限り、トランスナショナリズム論は越境的社会空間の発達度を測定し、それが新たな移民形態であることを確認し続けることになる。それゆえ本研究では、図1のような見取り図を彫琢し、新たなトランスナショナリズムの理論を構築する。これは、短期デカセギと定住化の間に3つの類型を設定し、その規定条件と帰結の関係を示し

ている（従来のトランスナショナリズム論は、調和型トランスナショナリズムのみを想定していた）。

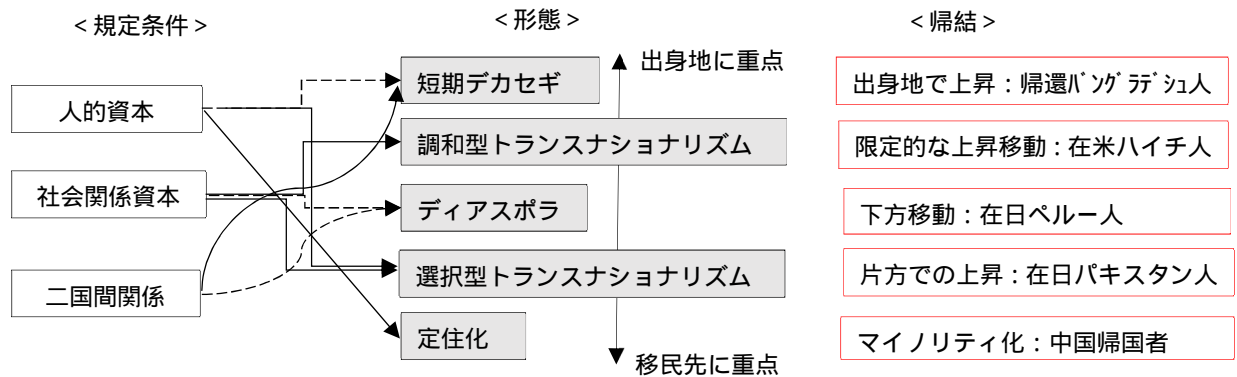


図1 移民形態を規定する要因とその帰結（実線は正の、破線は負の因果関係を示す）

3. 研究の方法

実証に際しては、ペルーと日本を往復する移民 650 人に対する聞き取りデータにより、次の 2 つの問いに答えていく。(1)ペルー人のデカセギは、図 1 でいうディアスポラへと移行している者が多いのではないかと。すなわち、出身地にも移民先にも安定的な基盤を作れず、結果的に下方移動しているのではないかと。(2)とはいえ、ペルー人のすべてがディアスポラに陥ったわけではなく、5 つの類型それぞれに一定の比率が該当する。では、何がそうした分岐をもたらすのか、規定条件として何を設定しどのような因果関係のもとで理解すればよいのか。

これまでの代表者の調査では、ペルーと日本の往復の繰り返しは、調和型トランスナショナリズムというよりはディアスポラを帰結する傾向があった。賃金差の縮小や不況など、移民に不利な二国間関係は、そうした傾向を助長する。ただし、その過程で人的資本や社会関係資本を蓄積した場合、他の類型に移行する可能性が高まる。これらの資本、移動といった要因を組み入れ、計量的に分岐を促す要因を明らかにすることが、実証面での最終的な目標となる。

4. 研究成果

3 までで掲げた類型との関連でいえば、トランスナショナリズムとディアスポラへの分岐を規定する最大の要因は、二国間関係であった。すなわち、ペルーと日本の間の経済格差が大きい時期にペルーに投資すれば、ペルーでも生活できるだけの基盤を形成できる。それにより、日本とペルーの両方に基盤をおいた形での生活が可能となり、どこに住むかは個人の選択の問題となる。他方で現在に近くなるほど日本とペルーの経済格差が縮小し、日本からの投資が困難になっていく。この場合、ペルーに帰国して安定的な生活を営むことは困難になり、日本での統合がゴールとならざるをえない。しかし、日本側の状況が不安定になったときには、やむを得ずペルーに帰国することとなるが、多くの場合はペルーで安定した生活を営むことができていなかった。その結果、再び日本での生活基盤を築こうとするが、それがかなわない場合が多い（あるいは一家離散を帰結することが多い）。

ただし、こうした結果は移民一世に関するものであり、移民二世代に関しては状況が異なる。移民一世の場合、自らの人的資本で日本での上昇移動を達成した例はきわめて少なかった。それに対して移民二世は、日本で教育を受けるがゆえに日本で有効な人的資本を形成できる。それに加えて、スペイン語と日本語能力という人的資本を、家庭や両国の学校を通じて形成できる

場合もある（そうでない場合もある）。これにより、移民第二世代の分岐は日本での貯蓄 それをもとにしたペルーへの投資ではなく、人的資本によって規定される度合いが高い。日本での学校教育で一定の達成を経た者は、日本の新卒労働市場へと参入し統合されていく（その過程で言語能力が生かされる場合とそうでない場合がある）。学業達成がうまくいかない者の場合、正規職に就く比率が低いことなどにかんがみて、ディアスポラの類型に近い性格を持つが、ペルーで暮らすこともできないがゆえに日本での周縁化とみたほうがよい（これは新たな類型設定を必要とする）。

他方、主に言語能力を用いて日本とペルーにかかわる業務につく者も一定程度存在していた。たとえば、ペルーにあるコールセンターでの日本語対応の仕事などは、最低賃金の3倍程度の収入を得ることができるし、高学歴が求められるわけではない。同様に、メキシコでのプラントでの通訳は、ペルーの最低賃金の10倍近くの収入になるため、二世にとっては魅力的な仕事となる。とはいえ、こうした仕事は長期間続くものではないため、トランスナショナリズムは不安定なものとなる。

まとめると、本研究で得られた主な知見は以下のようになる。(1)一世と二世でトランスナショナリズムからディアスポラに至る分岐の規定要因は、大きく異なる。(2)一世の場合、自らコントロールできない要因であるペルーと日本間の経済格差が大きな意味を持つのに対して、二世では自らコントロールできる人的資本が大きな意味を持っていた。(3)結果的に、二世の方が人的資本の蓄積を通じてやり直す道が開かれているのに対して、一世の場合はディアスポラに陥ったらやり直しがきかない点で困難がより大きい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 稲葉奈々子・高谷幸	4. 巻 348
2. 論文標題 彼女たちの働き方と働かされ方 ジェンダーから見た移民女性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journalism	6. 最初と最後の頁 52 - 59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 樋口直人	4. 巻 348
2. 論文標題 移民国家に向け責は投げられた 転換期との自覚を持った報道を	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journalism	6. 最初と最後の頁 45 - 51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 樋口直人・高谷幸・稲葉奈々子	4. 巻 23
2. 論文標題 移民と貧困をめぐる日本の構図 誰がなぜ貧困に陥るのか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 貧困研究	6. 最初と最後の頁 59 - 71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 HIGUCHI Naoto & INABA Nanako	4. 巻 206
2. 論文標題 Dekasegi: Luces y Sombras	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Kyodai Magazine	6. 最初と最後の頁 18 - 19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口直人	4. 巻
2. 論文標題 国籍 血統主義の転換を	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 朝日新聞東京本社版	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Higuchi, Naoto Andreas Niedeberger, Johanna Gordemann and Uchenna Okeja	4. 巻
2. 論文標題 East Asia	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Handbook of Migration Ethics, Springer	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 稲葉奈々子・樋口直人	4. 巻 24
2. 論文標題 ニューカマー二世代の大学進学	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 別冊環	6. 最初と最後の頁 257-261
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 HIGUCHI Naoto e INABA Nanako	4. 巻 Jul-Sep 2018
2. 論文標題 Estudio Academico sobre Peruanos	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Kyodai	6. 最初と最後の頁 18-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 HIGUCHI Naoto	4. 巻 diciembre 25, 2018
2. 論文標題 Actualidad de los inmigrantes en Japon	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Peru Shimpō	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口直人	4. 巻 14
2. 論文標題 ジェンダー化された編入様式 - - 在日外国人の分岐をめぐる分析枠組み	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 アジア太平洋レビュー	6. 最初と最後の頁 2-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 樋口直人・稲葉奈々子	4. 巻 272
2. 論文標題 間隙を縫う ニューカマー二世代の大学進学	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会学評論	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Higuchi Naoto	4. 巻 Enero 3
2. 論文標題 Cada vez los dekasegis tienen menos sueños y proyectos	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Peru Shinpo	6. 最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Higuchi Naoto	4. 巻 Febrero 6
2. 論文標題 Las relaciones familiares en el Peru todavia son muy fuertes	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Peru Shinpo	6. 最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 稲葉奈々子
2. 発表標題 日本における移民の編入様式 1980-2015 (3) 貧困問題からの検討
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 樋口直人・稲葉奈々子
2. 発表標題 外国につながる子どもたちの大学進学
3. 学会等名 シンポジウム「外国人につながる子どもたちの進路保障 小中学校の支援を経て高校、大学へ」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 日本における移民の編入様式 1980-2015 (1) 進学格差の変遷と分岐
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 HIGUCHI Naoto
2. 発表標題 From 'Blood Ties' to Meritocracy: Who Is Excluded from the New Migration Regime and Why?
3. 学会等名 DIJ Forum on "A New Era of Immigration? Guest Worker Programs in Comparative Perspective" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 稲葉奈々子
2. 発表標題 移民二世の学業達成の日仏比較のための枠組み
3. 学会等名 上智・ICU国際会議「移民二世の時代」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 移民第二世代の教育達成と教育制度
3. 学会等名 上智・ICU国際会議「移民二世の時代」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 多文化共生に何ができるのか
3. 学会等名 近畿地域国際化協会連絡協議会「今、あらためて“多文化共生”を問い直す」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 INABA Nanako & HIGUCHI Naoto
2. 発表標題 Situacion socioeconomica y educacion de los peruanos en Japon
3. 学会等名 IX Convencion de Federacion Mundial de Instituciones Peruanas (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 在日ブラジル・ペルー人におけるmobilityとimmobility
3. 学会等名 関東社会学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 労働 人材への投資なき政策の愚
3. 学会等名 シンポジウム「ここがおかしい、日本の移民政策」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 自治体・共生 あえて多文化共生を叱咤する
3. 学会等名 シンポジウム「ここがおかしい、日本の移民政策」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 稲葉奈々子
2. 発表標題 ジェンダー - - 格差是正のための政策に向けて
3. 学会等名 シンポジウム「ここがおかしい、日本の移民政策」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 樋口直人
2. 発表標題 ジェンダー化された編入様式 (1)移民集団間の分岐をめぐる分析枠組み
3. 学会等名 関東社会学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 稲葉奈々子
2. 発表標題 ジェンダー化された編入様式：(3) 移住者の貧困と文化的再生産論
3. 学会等名 関東社会学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 樋口直人	4. 発行年 2019年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 250
3. 書名 「労働 人材への投資なき政策の愚」高谷幸編『移民政策とは何か』	

1. 著者名 樋口直人	4. 発行年 2019年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 250
3. 書名 「自治体・共生 あえて多文化共生を叱咤する」高谷幸編『移民政策とは何か』	

1. 著者名 稲葉奈々子・高谷幸・樋口直人	4. 発行年 2019年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 250
3. 書名 「ジェンダー 格差是正のための政策にむけて」高谷幸編『移民政策とは何か』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	稲葉 奈々子 (INABA Nanako) (40302335)	上智大学・総合グローバル学部・教授 (32621)	